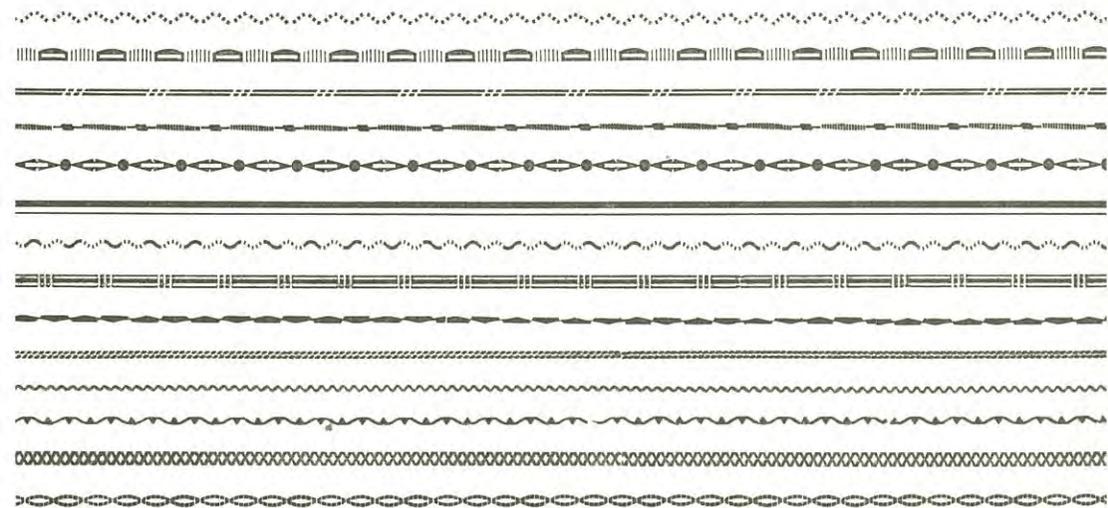


小
値
賀
島
で
生
き
る



OJIKA Island



も く じ

プロローグ	01
-------	----

対談インタビュー	03
----------	----

今田夫妻 × 村中ゆみ子	03
--------------	----

溝端裕子 × 前田夫妻	05
-------------	----

岩永太陽 × 橋本武士	07
-------------	----

濱口知子 × 谷正人	09
------------	----

平田賢明 × 唐見崎集落の皆さん	11
------------------	----

稲森章志 × 稲森美智子	13
--------------	----

横山桃子 × 江川春朝	15
-------------	----

小値賀町の補助制度	17
-----------	----

小値賀町へのアクセス	18
------------	----



パンフレット「小値賀島おぢかで生きる」を

手に取って頂き、ありがとうございます。

このパンフレットは、小値賀島で暮らす

方々の対談を綴ったものです。

離島ならではの不便さを背負う

この小さな島で生きるということは、

決して楽なことではありません。

それでも、ここに登場するみなさんは、

自分自身を、そして、島の方々との関係性を

大切に育みながら、幸せに暮らしていました。

「小値賀島で生きる」とはどういうことか。

それはこの島で暮らしてみないとわかりません。

ただ、そのいち部分を、このパンフレットを通じて、

みなさまにお伝えできればと思っています。



今田夫妻 × 村中ゆみ子 (浜津集落)

【語り手】

今田光弘 神奈川県出身／平成15年に移住
今田美保 神奈川県出身／平成20年に移住
村中ゆみ子 小値賀町出身

今田夫妻はお住いの浜津集落で「民泊・ぶらうさん家」を営む。同集落に住む村中さんにはいつもお世話になっているという。すっかり島の住民となった今田夫妻と島出身の村中さん。そんなお三方のお話を伺った。

海が見える家

「浜津に来られたのはいつですか？」

今田光 移住して2年間は前方というところで農業研修生として暮らして、その後、浜津に引越して来ました。研修生の頃から、次に住むなら浜津が良いなと思っていて。浜津の人たちは、適度に働いて、良い意味で適度に遊んで(飲んで)暮らしている印象があった。すごく惹かれた。空き家を探して、この家に会いました。当時の状態は酷いものでした。

村中 今田さんが引越して来る前にもこの家に入ったことがあったけど、すごく暗い印象だったのを覚えてる。

今田美 天井を掃除していたら土が落ちてきたりしていたの。

今田光 イタチも天井の穴から落ちてきた(笑)。リフォームを少しずつしながら、庭の大きな樹も、もったいなかったけど伐採して、

時間をかけてつくる関係

「どうやって集落に溶け込んでいったんでしょうか？」

今田美 ぶらうさん(今田光弘さんのニックネーム)が一人の時は、農作業もあったから役目に出られないこともあったと思う。私に来てからは、ぶらうさんが農作業した方が効率がいいので、私が役目に出たりした。

村中 うちも主人の仕事の関係上、私が役目に出ることがあって、そういう時よく美保ちゃんと話したんよ。それがきっかけかもね。昔はね、集落の運営資金を稼ぐために、ひじきも集落のみんなで採ってた。大変だったけど、てば(背負い籠)一杯分は各家庭で持って帰ってよかったのよ。

今田美 比較的若い人が磯で海藻を採って、お年寄り採れた海藻を干したりゴミを取ったりする役目もあります。こんな風に集落全体で分担しながら作業するのはとても素敵ない。役目に出られない時もあるけど、出れるときはぶらうさんと私の二人とも出るようにしたりしてます。



いきなりよそ者がやって来た

だいぶ明るくなりました。縁側から見える海が気に入っています。故郷の神奈川県平塚市と似ていて、太陽が海側に位置するの、しっとりくる感じがする。

今田美 ほんとに居心地がいい家です。

今田光 当時は、移住者がこの集落に来ることなんてなかっただろうから、たぶん集落のみなさんは困ったんじゃないかな。

今田美 集落の役目(草刈りや海藻採取等の地区行事)や常会(話し合い)に都合でどうしても出られない時があって、最初のうちはみなさんの理解が得られなかった。小値賀の人たちにとっては、集落行事は出るのが当然のことだから、「何者なんだろう」って思われてたと思う。

村中 そう言われたらそうね。

今田光 でも、絶対に排除はされなかった。

今田美 初めて集落の話し合いに参加した時に、「心配するな、りんぼ班(※1)がついている」って言われたの。その時は意味が分からなかったけど、後から思えばありがたい言葉よね。

※1 回覧板を回す班。ご近所。

「それで徐々に受け入れられていった？」



村中 集落にとつては、人が増えることは嬉しいこと。だけど、二人の人柄もあるとよ。今田さん(光弘さん)は気軽に話せるし、美保ちゃんには言いたいこと言えるし。相談もよくする。

今田美 普段は各々仕事もあるから、実はそんなに会う機会がない。地区の役目の時にしゃべりながら作業したりして少しずつ仲良くなっていった感じ。

オール小値賀

今田美 民泊のお客さんを海岸清掃の役目に連れて行ったことがあって。浜津の人たちは、すごくにぎやかに受け入れてくれて、終わった後はスイカやら魚やらが家に届いたの。

村中 民泊のお客さんが来てたら、いろいろと作った料理を持って行く。美保ちゃんも小値賀の田舎料理はできないっていうから、代わりに作ってあげたくて。

今田光 ある人が、オール小値賀で考えてるんでしょうか？

「言っていた。うちが民泊してるっていうことは、小値賀のみなさんでお客さんを受け入れてるってことだ」って。近所のばあさま達からもよくお野菜を頂く。

村中 私もそういう感覚かな。美保ちゃんと親しくなって、自分じゃできないけど、ちよっとお助け、縁の下の力持ちみたいな感じ。代わりに美保ちゃんから料理とか教えてもらうこともあるし、そしたら私も田舎料理教えるし。

今田光 物々交換の延長みたいな感じだね。ね。お互いにとっていい関係。そうありつつ、適度な距離感がある。小値賀の人はづかづか人の家にあがったりしない。それも居心地の良さだと思う。

この関係があるから安心

「これからの付き合いはどんな風に？」

今田光 これから歳を取っていくからね、

今田美 お互いの安否確認だね(笑)。浜津の中でこういう信頼関係があるから、居心地よく、安心して暮らせる。

村中 変わらず、和気あいあいね。





溝端裕子 × 前田夫妻 (前方集落)

【語り手】

溝端裕子 大阪府出身／平成27年に移住
前田邦利 小値賀町出身
前田百合子 小値賀町出身

地域おこし協力隊として小値賀町に移住してきた溝端さんは、前方(まえがた)集落にある前田夫妻の隠居に借り住まいしている。仲睦まじく暮らすお三方の日々の暮らしについてお話を伺った。

緑の屋根の家に一目惚れ

「今の家に住むようになったきっかけは？」

溝端 小値賀に来た当初は、コンクリート造りの建物に住んでたんだけど、もともと田舎育ちだから、都会の寂しさを感じた。少し暗かったし。

前田百 あそこは山影でな。夕方は暗かったやろう。

溝端 当時、空き家対策の担当をしてた地域おこし協力隊に空き家があるなら教えてほしいってお願いしたんです。そしたら、この集落(前方集落)の空き家を見に行くから一緒行かかって誘ってくれて。その時、たまたまこの家の前で邦利さんとお会いして、緑の屋根がすごい素敵で一目惚れだった。すぐの中を見せてほしいってお願いをした。ね、邦利さん。

前田邦 その協力隊の子には、「うちの隠居が

空いとるぞ」って言うてたんよ。

住めば都

「その時が初めての出会い？すぐOKもらえたんですか？」

溝端 そう運命の出会い(笑)。

前田邦 溝端が「ぜひお願いします。」って言うけん。まあ、家は空いてるより、人が住んだ方が良いし。

前田百 私は、最初は貸したくなかったんやけど。他に貸してる人の話は聞いたら、あんまりいい印象がなくて。どげんな子やろうかーって心配でね。大阪の大会の子はよか子はおらんやろーって。

溝端 笑。大阪に対する偏見凄すぎ。

前田百 いざ一緒に過ごしてみたら、田舎育ちの良い子だから、「あー、いろんな人がおるとね。」って思ったんよ。大阪の両親は小値賀に連れて来た時にお会いしたら、これまた良い人達でね。それからぼろぼろと打ち解けてね。でも、ここ(前方集落)に住むのは溝端ぐらいよ。

溝端 いやいや。こういう小値賀の中でも田舎の方に住んだ方がほんとに小値賀を感じれると思うし。

前田百 そげんな子ばかりじゃなかしね。

「笑、まあそつじやない人もいますよね。」

溝端 小値賀に移住してくる人は田舎が好きだと思っよ。

前田邦 住めば都たい。

溝端 うん。日本人の知り合いがおるから大丈夫。

「やっぱり心配ですね。」

前田百 親は心配やろー。

前田邦 かわいい子には旅をさせる(笑)。

「溝端さんとこうやって話すのは楽しいですか？」

前田邦 うん、やっぱ若いもんと話してたら楽しいよ。

前田百 やっぱりね。おらんごとなれば寂しなるよねーって思う。小値賀にずっと住めるといいんだけど。どげんななるかわからんしねえ。実家に帰るのもいいっちゃやないどね。

溝端 実家ももちろんいいけど、やっぱり住むなら小値賀。3か月島外に出ますが、ほんと、これからもよろしくお願いします。

前田邦 あなたのその明るいキャラならどこでもやっていけるでしょう。どこに行っても人が寄って来るやろ。

前田百 頑張っ

ておいでよ。寂しな

るばってん。かん

ころもち(五島列

島の郷土料理)も

手伝ってもらえん

し。

「早く帰ってき

て欲しいですね。」

前田百 ねえ。

前田邦 そうね。



家族のような団らん

「普段はどれぐらい団らんしてるんですか？」

溝端 結構しゃべる。朝洗濯物干してたら、邦利さんと百合子さんが外で魚こしらえてるから、「おはようございます。」から始まったり。

前田百 よう声掛けるしね。

溝端 百合子さんが夕食届けてくれたり。この前も長い間出張してて、帰って来てぐったり寝たらパンを置いててくれたり。

前田百 寝とったとね？外に出ると思っ

たよ。疲れたやろお。

溝端 今回の出張は後半は都会の町ばっかりだったので疲れた。帰って来たら安心するよね。ホッとする。あと、家の前の柿が赤くなって鳥が食べとったね。

前田邦 今年の柿はね、台風で葉っぱが落ちたけん太らんとさ。

前田百 あなたの

出張中の台風すご

かったとよお。

溝端 だいたい

つもこんな感じ

(笑)。団らんの時

は、その時の季節

の野菜の話か、昔

の小値賀の話か、

あと野球の話。こ

の三本仕立て(笑)。



前田邦 俺は単細胞やからそんなに話の種類は多くない(笑)。

溝端 いやでも楽しい。ここに今住んでなかつたらと思うとぞつとするよね。ほんと良かった。来年からはもうちよつと畑もできると思っよ。

前田百 はおー(※2)。最初に作ったカボチャもすごかったね。畑からはみ出してきて。あがんなるつち思わんかったね。最近は、忙しなつたもんねえ。

※2 小値賀弁。びっくりした時等に使う感嘆詞。

早く帰っておいで

「お仕事の話とかするんですか？」

溝端 ちょこちょこはするけど。百合子さんは気にしてくれるから。「カレー(※3)いけてんか？」って。

※3 溝端さんは協力隊期間中に小値賀島のピーナツカレーを商品開発した。

前田百 やっぱり心配やけんね。小値賀で食べていけるようになってちやろうかいって。今度はどこ出張するどね。

溝端 今度はインドとドイツに行く。3か月ぐらいの期間。

前田百 知り合いはおると？



岩永太陽 × 橋本武士

幸せは自分次第

― 実行するのに必要なものは？

橋本 でたでた、ありがちな質問(笑)。それ(実行)を前提に動いてない人がする質問。僕はただガムシヤラなだけ。

岩永 先のことは考えてない。宿やるにしても、最初は何したらいいかわからないし。とりあえず何とかなるやろって。図面できてお金借りれたら、やるしかない。リスク取らないと商売できない。

橋本 リスクは大事な要素やね。最悪を想定するんよ。僕の場合は、家がなくなつて、野宿しながら嫁と二人で自給自足を想定した。そうなるつもりはないけど、それも悪くないなって。なら幸せやんって。そこにマインド落とし込んだら、上に行くしかない。身もふたもないけど、今自分が不幸だと思ってる人が小値賀に来たら幸せなれるかっていうのがそうじゃない。そこを間違えがち。なんでその人が不幸なのかをその人自身が知ることが重要。あなたが変わらない限りどこに行っても不幸。

岩永 自分のモチベーションとか気持ちが変わらないとね。ただ、移住



【語り手】

岩永太陽 長崎県出身/小学2年生で小値賀島に転校

橋本武士 大阪府出身/平成21年に移住

岩永さんは宿泊施設「島宿・御縁」を、橋本さんはトマト農家として「りんたろうファーム」を立ち上げた。分野は違えど、島で起業した岩永さんと橋本さん。そんなお二人に、島でのビジネスの様子を伺った。

ルーツは小値賀

― 小値賀に来たきっかけを教えてください。

岩永 両親が小値賀出身で、小学校2年生の時に小値賀に転校して来た。一旦島を出てから、社会人ではツアーガイドをやっていた。その時にいろんな地方に行き、いろんな宿に泊まって刺激を受けた。母のブログを見て、小値賀が観光に力を入れているのを知って、小値賀で集客したり、海外の人を小値賀に呼べるんじゃないかと思って帰って来た。自分でビジネスをやってみたい気持ちもあった。

橋本 僕は大阪堺市の生まれだけど、ルーツ(両親)が小値賀の大島出身。夏休みは大島に毎年来てた。ずっと営業の仕事をして、晩年は大島で暮らそうって思ってた。大好きな叔父がいて、叔父も大島で暮らすって言ったんだけど、急に病気で亡くなってしまっただいふ凹んだけど、同時に「今すぐ大島に行

とか人との出会いは、変わるきっかけにはなると思うよ。そして、そういう出会いは小値賀にあると思う。

ビジネスって人間臭い

― もう少し普段のお仕事について聞かせてください。

橋本 田舎の人ってビジネスっていう言葉にアレルギー持つてる人も多い。たぶん、一円でも多くとか、マーケティングとか、そういうイメージなんだろうけど、僕はビジネスってもっと人間臭いもんだと思ってる。離島は船賃かかるし仕入れも少ないから商品の値段が高くなる。それで仕方ないと思ってるが長がないでしょ。だから、僕は飲食店に直接トマトを持っていくようになった。仲介がなければ、飲食店も安くつく。そのとき、僕がやるべきことは質を高くすること。お客さんが、りんたろうファームしか選べなくなる状況をつくる。道でお客さんと会ったら「おー、武ちゃんいつもありがどう！」「おーまいど！お疲れさん！」「って。この関係性があればオツケーでしょ。ビジネスは、お客さんとういう人間関係を育んでいく楽しさがある。もちろん継続しないといけないから、お金の勘定もするよ。でも、電卓たたくのはAIでもで



こうって思った。インターネットで調べたら、農業研修制度があるのを知って嫁さんに相談したら快く承諾してくれた。全然いいよって。いろいろと準備したら、移住するまでに結局3年ぐらいかかったかな。

キレイごとだけで移住しない方がいい

― 島でビジネスをするって実際どうなんでしょう？

岩永 小値賀にはプレーヤーが少ない。逆に言うと、なんでもビジネスにできると思った。自分のやりたいこともできる。

橋本 ライバルには、これ以上小値賀に来てほしくない(笑)。でもほんと、ここは宝の山やで。

岩永 だから、労働力のためじゃなくて、生産力をつくるために来てほしい。アルバイトじゃなくて、武ちゃんみたいにトマトをつくるのか、僕みたいに宿をつくるのか。

橋本 そういうビジョンをめちゃくちゃ具体的に描いて実行できる人って案外少ない。海が綺麗とか星が綺麗とか、それだけで田舎に住もうとするのはお勧めしない。

岩永 それで島を出て行った人を何人も見てる。これが現実。だから移住ってビジネスのことも考えて判断した方がいい。

橋本 僕らだって、来月の生活の保障なんてないしね。

きるし、そしたら雇用は生まれない。

岩永 宿の場合は、一人の時間を過ごしたそうなお客さんの空気を読むとか、リピーターには自転車無料で貸しちゃうとか、お客さんとの関係をつくるのが楽しい。

橋本 単純に嬉しいよね。数ある中から、自分のトマトとか宿を選んでもらえることが。僕たちは魂込めてやってるから。選んでもらえたらすごい嬉しい。感謝しかない。

― そのモチベーションがすごい。

岩永 島に帰ってきたら負けてイメージがあるんよ。そんなことで食っていきけるんかって、周りから何回も言われた。絶対にそうじゃない、見返してやるって思ってる。**橋本** 心の中心に、普段言語として出てこなくて、自分も時々しか気づかない神経が通ってるのよ。何かパワーの源というかな。仕事続けてると、やることがなあああになつてきたり、ルーティンワークになつてきて衰退してきてと思う。でも、その神経を持ってると立ち戻れる。こんなんじゃないかって。

岩永 同じことじゃなくて、次のチャレンジをするぞっていう気持ちでやれる。





濱口知子 × 谷正人

【語り手】

濱口知子 長崎県出身／平成29年に移住
谷 正人 小値賀町出身

元美容師の濱口さんがよく飲みに来るといふ谷商店。移住して来た当初は毎日のように来ていたそう。その居心地の良さを探るために、濱口さんと谷商店の店主である谷さんにお話しを伺った。

飾りっ気の無い
おもてなし

小値賀に来たきっかけを教えてください。

濱口 島生活をしたかと思っていて、友人に相談したら、小値賀島を教えてくださいました。その子が小値賀島出身なんですけど、その時「谷商店」をおススメされて、一人で飲みに行きました。それがちょうど一年前ぐらい（平成29年10月）。

谷 その濱口さんの友人と俺も知り合いだったんですよ。俺にも「友達が行くからよろしく。」って電話がかかってきて、いつものガラ悪い連中（笑）を集めて一緒にここで飲んだのが初めて。男ばっかりやったよね。

濱口 全員男だった（笑）。

小値賀でガラ悪い人たちと飲むのは大変だったんじゃない？

濱口 めっちゃ楽しかった！次の日も小値賀



濱口 なんてだろう、家から近いってのもあるけど、なんか行きたくなくなっちゃう。谷 飲みに来るといふか「話しに来よう」って言いよったよね。

濱口 そうそう。自分の中でわからないこととかあった時に、一番に相談したくて。酔っぱらってることが多いので、話の内容あんまり覚えてないけど。

谷 どんな流れでそうなるかわからんけど、ペロペロになって深夜2時ぐらいに熱く語るよね（笑）。

濱口 なんか、尊敬する美容師の先生と、正人さんの言うことが似てる。柔軟なんだけど、芯はしっかりしてるというか。私の話を聞いてくれて、受け止めた上で、こういう考え方もあるよってアドバイスしてくれる。こういう話を真剣にできるのは、正人さんしかない気がする。

自分自身の
経験があるから
受け入れられる

正人さんは柔軟とか意識してますか？
谷 意識してるわ



良い話だ。そんな話をいつも濱口さんは聞いてるんだ。

濱口 とても勉強になる。ほんとに先生が言うことと似てるので、美容師の先生が言ったことを再確認できる。だから、安心できるというか、ホッとするんです。

これからも先生みたいに

谷 ずっと昔から、社長になるのが夢。

中を観光案内してくれました。

谷 時間がある奴が案内してやろうって話になったんでしょうね。移住してきた人がよく言うんだけど、小値賀の人ってほんとによく人を受け入れるみたい。俺らは昔からそれを見てきたから意識してないけど。確かに、この日すでに濱口さんに「小値賀に（引）越して来いよ！」ってみんな言っていた。小値賀の人にとってはこれが当たり前の文化。当たり前だから、おもてなしに飾りっ気も、つくってる感じもしない。

小値賀に飾りっ気がない。

濱口 うん。だから、初日で一人でもすぐ溶け込みやすかった。居心地良いっていうか、素で居れるっていうか。

谷 初日から濱口さん結構イジられてたよね（笑）。でもそれは、濱口さんが素を出してくれたからだと思う。

なんかわかんないけど
行きたくなる店

どれぐらいの頻度で飲みに行くの？

濱口 最近減っちゃったけど、

谷 最近は漁師さんたちとも飲んでるみたいやしね。前は週5日ぐらい来てたやろ（笑）。

濱口 うん行った。自分の家で1、2本（飲んで後にお店に行っちゃう）（笑）。

それ面白いですね。なんでだろう？

良い夢ですね。

谷 職種はなんでもよかった。島外で美容師もやったけど、25歳で小値賀に帰って来た。美容師ってきついですよ。時給低いし、残業多いし。島に帰って社長になって、雇用をつくって、島外に出た人を一人でもいいから呼び戻そうと思った。現実は厳しいんだけど。

濱口 美容師って儲けが少ない時もあるけど、豊かになるよって、先生もよく言っていました。

谷 あー、心がやる。お金はないけど。

小値賀に飾りっ気がない。

谷 笑。うーん、どうだろう。まだまだ勉強中ですね。

濱口 ほんとに、まだまだ勉強中です。でもこれからは厳しいことも言ってもらいたい。すごく信頼してるんで。

谷 ありがとう。早くイイ男見つけて、小値賀島に残ってください（笑）。

結婚願望はあるの？

濱口 あるある！

谷 いっぱい独身男性には囲まれてるんだけどね（笑）。

濱口 なんてやろ（笑）。





平田賢明 × 唐見崎集落の皆さん

【語り手】
平田賢明 長崎県出身／平成22年に移住
崎山信好 小値賀町出身
神崎弘子 広島県出身

町の学芸員として小値賀町の文化財研究に携わる平田さん。研究を重ねる中で、唐見崎（からみざき）集落がホッと一息つける場所に変わっていったそう。そんな平田さんと唐見崎集落の皆さんのお話を伺った。

島の子どもたちを連れて来たくなる集落

— 小値賀に来たきっかけを教えてください。
平田 もともと埋蔵文化財関係の仕事に携わっていて、小値賀町で学芸員の募集があったので応募しました。文化財の仕事のやり場を目指して小値賀に来ました。

— 唐見崎にお世話になることになったきっかけはなんでしょか。
平田 唐見崎は、平成23年の9月に国の文化的景観に選定されて、それを機にここにお邪魔するようになった。崎山さん達にもその時にお会いして以来、来るたびにいろいろと唐見崎の昔の話を伺った。

崎山 私は早くに父親を亡くしたので、子どもの頃から自分でいるんなことをやらなくてはいけなかった。草履を自分で作ったり。お

かげでいろんなことができるようになった。
平田 そういう話を聞いてるうちに、島の子供たちを唐見崎に連れてきたくなって、中学生を連れてきて信好さんたちに会ってもらってる。

— 具体的には子どもたちとどんなことをここでしているのでしょうか。
平田 小値賀中学校の中で「小値賀学」という郷土史学習があつて。集落の中を歩いてもらって、どこにお地藏さんがあるとか、どこに井戸があるとか、畑があるとか、唐見崎の集落がどういう風に形成されてるかを勉強したりします。他にも、地元のおじいちゃんおばあちゃん達に先生になってもらって、昔のお話を伺ったり。

来る度に頑張ろうって思う

崎山 唐見崎がこんな風に寂しくなるなんて夢にも思わなかった。昔はすごく賑わっていた。本城岳に広場があつて、そこでこの集落の運動会もしたんだよ。

神崎 4班あつて競い合った。前の晩には作戦を練ってたね。「来年は足の速いお嫁さんをもらんば」とか冗談も言ってたね。こないだも思い出話で笑いました。

平田 自分の文化財関係の勉強にもすごく協力してもらってる。仕事で迷つてるとき

とかに、唐見崎になんとかふらつと来て、みなさんとかうたって話していると、なぜか頑張らんばって思うとですよね。いつ来ても皆さん変わらない。
崎山 あんたは半分唐見崎のもん(者)たい。
平田 よそ者だからって構えるわけでもなく、おいでおいでって言うわけでもなく、居るなら居ればって感じで受け入れてくれる。
崎山 相手次第ばつてん、唐見崎は誰が来ても歓迎する。
— 平田さんのようなよそ者が来るのはどんな感じですか？
神崎 うれしいですよ。今日も話しよったとですよ。ここには何にもないけど、こうやって人に来て頂けるだけでも嬉しいって。
崎山 そして、いつも平田さんは俺ばつかり呼ぶ(笑)。
平田 中学生の授業の時も、お客さん(観光客)が来た時も、すぐ信好さんに電話するね。いきなり明日行きますとか言うこともある。
神崎 信好さんはなんでも知ってるけん。10人程のお客さんが来た時も、あなたが分か



他にはない味わい

平田 こういう魅力ある集落なので、多くの方々に知ってもらいたいと思って。文化財も多いので、解説案内板を設置している。そういうのもあつて、ちょこちょこ観光客にも来て頂いてるみたい。
神崎 この前もアコウの樹が素晴らしっていう外国人が来た。



平田 このアコウの樹知ってます？とても感動するアコウの樹があるんです。ただ大きいだけではなく、笛吹地区(小値賀町の中心部)では味わえない、唐見崎の良さがあるですよ。
神崎 中学校のALTの先生も癒されるって言ってた。

— 他では味わえない唐見崎の良さとは？
神崎 人情味があるって言うんでしょうか。私もこの出身じゃないんですが、そういうのがあるから、この歳までここで生きてこれた。昔は38軒みんなが農家でした。

生きがいをつくる仕事

— お仕事のモチベーションって何ですか？
平田 たぶん文化的景観とか地元の人たちは意識してないんです。けど、ちょっとでも観光客がここを訪れて、集落のみなさんがいろんな話をするので、みなさんの生きがいになればなあって思います。そういうのがやりがいですね。さつきも10人程お客さんが来たって言うていたでしょ。そういうのが嬉しい。あとは、みなさんが少しでも元気に長生きしてもらえれば。小値賀島の若い人や観光客に、唐見崎のみなさんの話をもっと聞いてほしい。

これからも、みなさんの生きがいづくりの役に立ちたい。





稲森章志 × 稲森美智子

【語り手】
稲森章志 三重県出身／平成19年に移住
稲森美智子 京都府出身／平成19年に移住

農業研修生時代を経て、トマト農家として就農した稲森夫妻。今は三人のお子さん達と生活している。島での農業や子育てについてお話を伺った。

田舎の人間関係に憧れて

― 小値賀に来たきっかけを教えてください。

稲森章 元々は奈良県や三重県の工場でモノをつくる会社員でした。テレビで野崎島の特集を見て、インターネットで色々調べて小値賀島のことを知りました。

稲森美 ずっと農業がしたいと二人で話していたところ、小値賀島の農業研修制度があったので、いいなと思って小値賀島に来ました。

― 他の田舎を見に行ったりはしなかった？

稲森章 行ってないですね。まずは観光も兼ねて民泊を利用しました。そこで農業体験もさせて頂いて。

稲森美 島で暮らしたいと思っていたので、小値賀に来た時に「ここだー」と思いましたね。他を探す必要もないと感じました。よく奈良県や三重県でも農業はできるじゃんって言われるんですが、まずは人と触れ合うことがし

たかったんです。島という限られた地域で、島の人たちと協力しながら島の特産物を作るようなイメージを持っていました。

― そういう人間関係に憧れてたんですか？

稲森美 三重に住んでる時は寂しかったんですよね。アパート暮らしだけど、隣の人のことは何も知らない。ご近所の方とたわいもないことでもいいので、お互いに気を掛け合える関係にすごく憧れてました。たまたま便利さを求めて都会に行くこともあるけど、いざ暮らすとなると小値賀がいい。島外から帰りの船に乗ったら、「帰ってきたー、良かったー。」って思えるんですよ。私は、島の一員としてみんなで切磋琢磨しながら暮らしたい。何が出来るかはわからないけど、自分たちは今頑張ってるトマトを作ってる。

真夏のビニールハウスを耐えられるか

― なぜ農業をしたいと思ったんですか？

稲森章 なんか面白そうだった。工場でもモノを作るのが好きだったんだけど、工程の中の一部分しか携わらないから、達成感がなかった。農業は一から出荷するまでを自分の手でやれると思った。その分、失敗したら全部自分の責任ですし、逆に上手にできたら達成感ある。

別れと出会いが自然と学べる環境

― 子育て環境として島はどうですか？

稲森章 環境は抜群ですね。

稲森美 島のみんなが見守ってくれるので安心。私たちもみんなの子どもを知ってるし、お互いに気に掛け合える。今は同い年が10人だけど学校の先生の子どもは転動でいなくなるかな。でも、そういうお別れとか新しい出会いを小さい頃から自然に体験できるのはいい。自然に教育されてるというか。フェリー乗り場で紙テープしてさよならやったり、感極まって泣いてる子供もいる。逆に、新しい子が来たらすぐ打ち解けて仲良くなる。小値賀に来て、みんなと馴染みにくいっていうのは聞いたことがない。お互いにすごく良い雰囲気、仲良くしてるんだろなって思ってる。

稲森章 来年からは小学生。とても楽しみ。元気に大きく成長してほしい。



― 研修期間中のことを教えてください。

稲森章 夏がすごく暑くて、体重が減った。

稲森美 すごく痩せたよね。ビニールハウスの中は日中36℃ぐらいになる。それでも、生き物を扱うので、休みもあってないような状況。ずっと作業してた。

稲森章 休んでなかったね。厳しかった。

稲森美 でも、それがあつたから就農できたとと思う。まずは研修をきちんと続けて、就農するんだっていう覚悟が重要。それがなくて途中で研修をやめた人もいるので。

試行錯誤の末の喜び

― 就農してからはどんな様子ですか？

稲森章 研修中は大玉とかミニディラムを作ってたんですが、就農してから初めてミニトマトを作りました。試行錯誤しながら品種も変えます。品種によって全然特性が違うので、その都度いちから勉強してる。去年の品種は冬に割れてダメだった。今年は割れにくい品種を試してる。もっと前に作ってたのは病気がすごく発生したり。他にも病気対策として接ぎ木をするんですが、今



年は費用が大きくなりそうだったの、接ぎ木せず育てたら、病気になって何本か抜いた。当然、品種が変われば皮の厚さとか食感も変わるの、品質を一定に保つのも苦労する。就農して8年間、こんな風に毎回試行錯誤しながらやってる。なかなか目標の収量に届かないのも実情です。

― 8年ずっと試行錯誤。聞いているだけで心が折れそうなんです、。

稲森章 お金を稼ぐ手段だけ考えてたら農業してないかな。楽しいですよ。お客さんにはおしいって言ってもらえるし。トマト嫌いな子も、小値賀のトマトだったら食べてくれる。

稲森美 小値賀のトマトを食べたら他のを食べられないって言ってもらえたこともある。失敗もあるけど、落ち込んでても仕方がないし、来年頑張ろうってなる。会社勤めと違って、自分たちのペースで思うように生きていける。毎日忙しくしてるけど、島のゆったりした空気もあって、それが丁度いいんです。時間はかかるけど、安定した収量を確保して、小値賀のトマトを広めたいです。





横山桃子 × 江川春朝

【語り手】

横山桃子 小値賀町出身／平成23年にUターン
江川春朝 小値賀町出身

島に受け継がれてきた活版印刷技術を継承する四代目の横山さんと地元で商店を経営している江川さん。ともに小値賀生まれのお二人の小値賀に対する想いを伺った。

商工会青年部

「お二人はどういう時に話をするんですか？」
横山 商工会青年部の活動の時かな。パッションは青年部やね。

江川 青年部に入ったら、「仕事が忙しいから活動に参加できません」とか通じない。めっちゃ厳しい。俺も入った当時は怒られた。青年部主催の夏祭りの準備で、親戚が来るから最後の片づけだけ休ませてもらったら、めちゃくちゃ怒られた。

横山 決して間違っではないのにな。

江川 でも青年部主催の祭りやし。いろんな人に協力してもらってる。そういうのを心の底からわかっているかどうかやね。当時はわかってなかった。だから怒られた。

横山 私も結構怒られてる。夏祭りの準備に行かず、サザエ取りに行ったらバレた。

江川 なんて青年部に入りたかったんですか？

横山 市町村合併問題にさかのぼるね。

江川 行き着くね。

好きなら好きって言えばよか

横山 小値賀大好きで帰ってきたわけやん。でも、島出身で小値賀大好きだって言うって活動するのはやりづらさを感じる時もある。島に帰って来ると、島外で失敗して落ちぶれて帰ってきたみたいなイメージがあつて。



江川 負け犬ね。

横山 でも、はるるんはそういうの気にせず「俺は小値賀が大好きだ。」って言う。夏祭り30周年のタオルの言葉にすごく感動した。

熱い小値賀愛のメッセージ。「なんもなかけん、」ってやつ。

江川 純粹に言っているんだって。みんな恥ずかしくて言わんけど。

横山 それを堂々と出してる姿があるけん、私もすんなり気持ちを出せる。ありがたい存在。

江川 ど田舎もんは堂々とど田舎もんっていうのば自覚した瞬間楽になれる。わっか(若い)頃にそれに気づくわけじゃない。やつば格好つけたいし都会に憧れるのも当たり前。でも、小値賀に帰ってきた時に、乗り越えんばいかん最初の壁。移住者の場合もそう。小値賀に

横山 合併問題は私が高校生の時。島の多くの人たちが合併賛成だったんだけど、青年部だけは反対だった。うちの親も、はるるん(春朝さんのニックネーム)の親も熱い想いで反対してた。その姿を見て、青年部に入りたかった。

江川 立場上、賛成せざるを得ない人もいた。ほぼ合併は免れない感じの状況だった。

横山 国の動きに逆らうって相当大変よね。

格好つけても仕方ない

「横山さんは島を出た時はUターンするつもりはあったんですか？」

横山 Uターンのつもりはなかったけど、小値賀愛があった。小値賀のことが大好きだった。

江川 帰ってくるつもりで島を出ていく奴はおらん。出ていくことは基本的にほぼ宿命。出て行ったあと、帰ってきててもよかつていう環境でもなかった。俺らの親は親心で島の外に出そうと教育するけん。

横山 はるるんは外に出てすぐ帰ってきた。

住んだ時に、自分は都会から来たんだとかどことこの大学出たんだって心のどっかに思ってるんだつたら、自分はど田舎もんなんだって自覚した瞬間すごく楽になるよ。

小値賀が最先端

「後輩へのメッセージはありますか？」

江川 小値賀に住んでるっていうことだけで最高。小値賀がいくら衰退しようが、俺たちの生活が小値賀ともにあるだけで十分幸せ。桃子に言うことなんてない。だつてこの子も衰退しようとしている仕事ばやろうとしている。はた目から見たら時代遅れやん。でも、逆にこれが先端なんだっていう発想をしている。小値賀の将来と一緒に衰退していく小値賀が最先端なのよ日本にとつて。どうせみんな歩む道。それを早くに経験するって悪いとは思わん。

「春朝さんはどんな存在？」

横山 うざいし、腹も立つけど、兄貴であり、道しるべであり、小値賀になくてはならない存在。

江川 兄弟よね。桃子もおらんといいかん時がある。



江川 普通さ、隣にいる人と話さやん。少なくとも挨拶する。都会は隣にいる人も前にいる人も無視せんばいかん。「お前ら大丈夫な？」って思ってたけど。こんだけ人がいるのに孤独やん。不思議よね。

横山 小値賀に帰って来て思うのはみんな一緒に生きてるっていうこと。どこに行っても知り合っている環境で働らいて暮らせるってのは幸せなこと。

江川 自分の良かところも悪かところも見透かされる状況。それが嫌だったり、疎ましく思う人は都会に憧れる。でも、自分の悪かところば人に見せないと何事もスタートできんやん。それができんやつたらいつまでたつても居心地悪いって思うよ。

横山 言い話。良いこと言たはるるん。

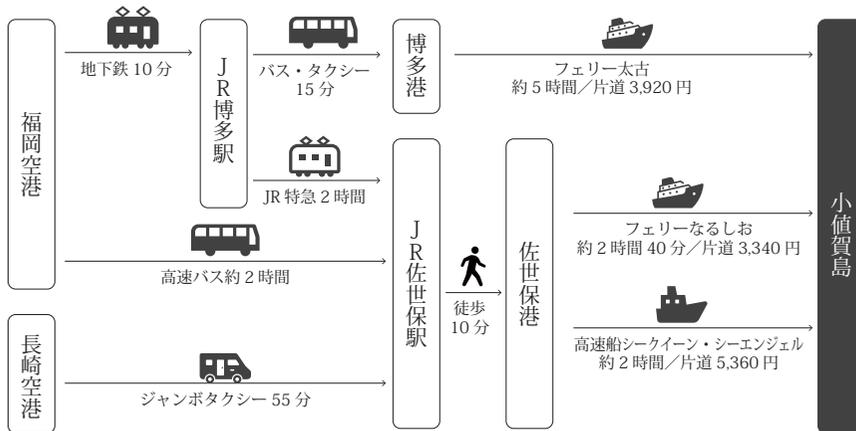
江川 なんてお前に褒められないかんとな。この島では、嘘ついてても仕方ない。見栄はつてもよしかたない。

江川 それは移住者にも言える。格好ばつかつつとつても、真実が伝わってこんけん、小値賀のもん(者)になれんよね。正直に自分の思いば言たらよか。小値賀嫌いやつたら嫌いで正直に言た方がよっぽど好かれる。



■小値賀町へのアクセス

小値賀町



【野母商船】
TEL : 092-291-0510
WEB : <http://www.nomo.co.jp/taiko>

フェリー太古

	博多	小値賀
下り便	23:45 発	4:40 着
上り便	17:50 着	13:10 発

【九州商船】
TEL : 095-822-9153
WEB : <http://www.kyusho.co.jp>

フェリーなるしお

佐世保	小値賀	佐世保
	7:00 発	10:15 着
10:40 発	14:00 着	16:50 着
17:10 発	20:25 着	

高速船シークイーン

佐世保	小値賀	佐世保
	7:25 発	8:55 着
9:20 発	10:50 着	12:45 着
	10:55 発	
15:40 発	17:10 着	

高速船シーエンジェル

佐世保	小値賀
12:40 発	14:50 着

※ダイヤは変更することがございます。各社 HP にてご確認ください。

■小値賀町の補助制度

① 農業研修制度

【研修期間】：原則3年間
【生活支援】：16万円/月の支給・Iターン者には住宅手当(1万円/月)あり

② 漁業研修制度

【研修期間】：原則4年間
【生活支援】：16万円/月の支給・Iターン者には住宅手当(2万円/月)あり
【活動費】：20万円/年

③ まちづくり担い手交付金

【新規事業準備金】
町内で新たに正業として農水産商工業へ就業する方、もしくは後継者となる方(18歳以上60歳未満)を対象に、準備金として、金50万円を補助します。

【若者定住奨励金】

新規学卒で町内に住民票を有しかつ町内に居住し、今後も定住する意思を持つ方、もしくは小値賀町への転入者で町内に2年以上定住された方に金5万円を支給します。 ※公務員(配偶者を含む)を除きます。

【経営資金の利子補給】

町内で新たに事業を起こす方、または後継者になる方で公的資金の借入れを行った方へ、3%を限度とした利子の補給を行います。

※その他、各種補助制度あり。

④ 出産育児関係制度

【小値賀町安心出産支援補助金】

1. 出産に備え事前に本土滞在時の宿泊費の3/4の金額 1泊6,000円を限度(食費は除く)
2. 定期受診をする際の交通費(船賃のみ)の支給
3. 妊婦がやむを得ず緊急に移送された場合の移送費の3/4 100,000円を限度とする(医療保険からの給付があるものを除く)

【小値賀町出生祝金】

1. 出産時100,000円(第1子)
2. 出産時200,000円(第2子)
3. 出産時300,000円 小学校入学時200,000円(第3子以降)

【出産育児一時金】

妊婦さんの経済負担を少しでも軽減できるように出産費用42万円(国保の場合)を加入している医療保険(国保、社会保険、共済保険など)が直接医療機関に支払うシステム

————— まずはお気軽にお問い合わせください。 —————

① 移住に関するお問い合わせ

小値賀町総務課企画係（移住者相談ワンストップ窓口）

〒857-4701 長崎県北松浦郡小値賀町笛吹郷 2376-1

TEL：0959-56-3111（8:30～17:15 土日・祝日・年末年始を除く）

FAX：0959-56-4185 / MAIL：soumuka@town.ojika.lg.jp

WEB：http://ojika.net/

② 観光に関するお問い合わせ

おぢかアイランドツーリズム

〒857-4701 長崎県北松浦郡小値賀町笛吹郷 2791-13

小値賀港ターミナル内

TEL：0959-56-2646（9:00～18:00）

FAX：0959-56-3530 / MAIL：yoyaku@ojikajima.jp

WEB：「おぢか島旅」http://ojikajima.jp/

^ ^ ^

